ペルー新報
ペルー新報
（日刊）
配達料込み
月額S/.50
窓口売り
一部S/.2

在日ペルー人の統合を支えるＡＪＡＰＥの歩み
―多文化共生と伝統継承の両立を目指して―

AJAPE インタビュー：ホセ・ブラボ・コハツ会長に聞く

AJAPE会長のホセ・ブラボ・コハツ氏

ホセ・ブラボ・コハツ氏とロサ・マリア・サクダ氏

日本におけるペルー人コミュニティが、大きな転換期を迎えている。国籍を問わず、ペルー人やラテンアメリカ出身者の日本社会への統合に貢献することを目的としたボランティアグループが、「ＡＪＡＰＥ」である。同協会の現会長を務めるホセ・ブラボ・コハツ氏（４１歳）に、その歩みと課題を聞いた。

ＡＪＡＰＥの前身は「ＡＰＥＪＯ（ペルー日本協会）」として知られていた。１９９４年に最初の役員グループが結成され、当時のペルー領事館の支援を受けた。１９９０年代初頭、ペルー人が日本の生活に慣れず、日本社会との間に問題を抱えていたためである。当初はペルー人によって、ペルー人のために作られた組織であった。

その後、子供たちの教育支援として、２００２年に町田市で補習授業を開始した。２００４年にはスペイン語教室も始めている。現在は町田市での学習支援や、大和市での継承語としてのスペイン語教育を通じて活動を続けている。

２０２５年度スペイン語継承語教室の閉講式に集まった、ＡＪＡＰＥ神奈川の講師、スタッフ、ボランティアの皆さん

ブラボ氏は８歳で家族と共に来日した。宇都宮大学で博士号を取得し、現在は輸入会社で働きながら、慶應義塾大学でも教鞭を執っている。ブラボ氏は、在日ペルー人が直面する主要な３つの障害を指摘する。

第一の壁は「日本語」である。第一世代は日本語を話さないため、日常生活に困難をきたしている。第二は「経済面」であり、工場や請負業者での労働が多いため経済的に不安定な状況にある。第三は「コミュニティの高齢化」である。出稼ぎとして来日した世代が、年齢により働けなくなり、年金制度に加入していないことも多く、老後の生活に不安を抱えている。

また、日本にいるペルー人は自身のアイデンティティを日系よりもペルー人だと感じている。ブラボ氏は「今活動しなければ、日系というアイデンティティも含めて失われてしまう」と強い危機感を持つ。

同氏の最大の満足は、新しい世代が日本社会で活躍する姿を見ることである。受入国である日本の法律や規則を守りながら共に生活し、ペルー人やラテンアメリカ人のアイデンティティを大切にする。ＡＪＥＰＥの活動は、ペルー日系社会にとって重要な示唆を与えている。

（インタビュー：佐久田ロサマリア）

ＡＪＡＰＥ主催で開催されたクリスマス会